外国語教育のあるべき姿

安井　泉
人文社会科学研究科教授　外国語センター長

筑波大学の外国語学習の理念

筑波大学の外国語センターは、一年次で履修される英語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、ロシア語、スペイン語の７つの共通外国語の教育を担当している。

大学で学ぶための重要な能力を培うには、(i) 口頭でのコミュニケーション能力、(ii) 問題解決能力、(iii) チームワークの出来る能力、(iv) 自分の学習能力をより向上させてゆこうとする姿勢と意欲、(v) ビジネス感覚・交渉能力、(vi) 独創性と新しい発想の６つが重要であるが、この多くが外国語の学習にも求められる。大学で自分にしか書けない作品･論文を作り出し、自らの力で研究を遂行するのに必須となる基礎能力を育成する中で、とりわけ重要となるのは原典や原資料と格闘するための文献読解能力であり、読んでは考え、その考えを的確に人と伝達し合うコミュニケーション能力である。外国語の能力は母語の能力を越えることはできない。母語である日本語の能力を 100％まで伸ばすことが必要となる。どの言語も中途半端であると、ものを深く自由に考えることはできない。外国語学習の基礎は母語である。母語の力を高めるよう精進しながら、外国語の学習に向き合う必要がある。

外国語の「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」能力の育成は、このような信念に基づいて、大学の策として社会の要求として、どれほど系統的に綿密に、そして手厚く真剣に行われなくてはならないのか、その模索を繰り返しながら、外国語センターは、効果的な授業を実現するための教育方法の工夫改善をたゆまずおこなってきた。

外国語の会話では、その外国語の独特の雰囲気が身体性として体現する。たとえば、英語を母語とする外国人教員による授業の良さは、異なる文化を背景とした「英語の身体」に教室の空気を染め上げることにあ

る。一方、精読や作文などで学生が何を言えないでいるのかを「察する」能力は、学生と母語を共通にする日本人教員が優れて特性を発揮する。各々の利点を生かしながら外国語教育の方法を中心に積み上げられてきた工夫の集積のひとつが、外国語センターが行っている英語とドイツ語の検定試験である。たとえば、英語に関しては、「1年次生対象の英語検定試験を伴う英語教育」という仕組みによって、一年終了時の必要最小限の実力を身につけたと認定されることを条件に単位の認定を行っている。

外国語教育には、実質陶冶と形式陶冶という二つの面がある。一つは、創造的な知性と豊かな国際性を備えた人材を養成し、学術文化の進展に寄与することを目的とした本学の建学の理念に基づき、「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」の4技能のバランスの取れた実用的能力及び技能を養う実質陶冶としての言語教育である。もう一つは、論理的思考はことばによって養われるという理念に基づく英語の学習を通じ、深くものを考え洞察し推理する精神的能力を養う形式陶冶としての言語教育である。大学の外国語教育では、この二つの面のいずれをも大事にし、知識・技能、知恵、想像力の三つの側面を培う必要がある。その結果、はじめて「異文化対応が可能なコミュニケーション能力」の育成を目指すことができるのである。

ほかの五つの外国語では現段階では検定試験は実施されていないが、初めて習う外国語の一年後の熟達度を測定する方法として、検定試験によるものがよいという積極的な判断をもてずにいるという理由による。いずれにしろ、一年終了時において、これだけは十分に習得すべきものという基準策定の関心は高く、一部の外国語では平成18年度より、カリキュラムに反映していくことになっている。

大学の外国語教育に求められるもの

教育には、どう教えるかという how to teach の側面と何を教えるかという what to teach の側面とがある。いま大学の外国語教育では、何を教えるかが取り上げられ、学生は何を教わり卒業していくのかということが、各大学のスタンダードとして議論されている。

「上質なことばの読み方」を目指すべき外国語教育が、現代では実用という側面に傾斜しやせ細っていかんばかりの危機的状況にある。ことばの教育では、他人の考えを深く理解することと自らの考えを限りなく的確な表現できちんと語ることを、中身と表現の両輪で鍛錬することが必要となる。

上質なことばの読み方というのは、何が書かれているかはもとより、どう書かれて

いるかを読み取ることである。

商店街を通り抜けて目的地に行くことを考えてみよう。車で行くこと、バスで行くこともできる。目的地には行けても、途中の景色はただ店屋が並んでいるにぎやかなところを通ったという印象しか残らない。自転車で行けば、どんな店があったのかもう少しよくわかる。歩いて行くと、自転車で通ったときには気がつかなかった店にめぐり合うことができる。歩いてみてはじめてそうしなかったときにずいぶん損をしていたことに気が付く。ものを読むということはこういうことに似ている。あら筋を知ればよい読み方、どう書いてあるかを楽しむ方法、いずれも、ものを読むということは、それと書いた人と向き合うことである。そういう世界に気が付く感性は、外国語の学習でこそ最良の形で培われるのだ。

何を教えるかという what to teach に関して留意すべきは、ぺらぺらと内容のないことをしゃべるような人間を育成しないことである。たとえば、歓談やパーティの席上で、英語で言えば Shakespeare（1564-1616）などの古典の一節でも暗唱できれば、海外での尊敬はそれだけでずっとたやすく得られることになる。それだけで周りの扱い方がころりと変わったという話は、いろいろな折に年配の人から耳にする。そこではじめて本から抜け出たような英語でもしゃべろうものなら、尊敬のまなざしはいっそう強くなる。こうなれば、中身のある話であれば、たとえつたない話し振りであっても、はじめてじっくりと聞いてもらえる。国際人というのは、外国に行っても尊敬される知恵と態度をもった人を養うことであり、それが教養教育の真髄である。その上に専門の知識が積み上げられていくことになる。

関係代名詞を使った構文、名詞を駆使した構文、副詞の意味を組み込んだ動詞を用いた文など、一歩進んだことばを学習することから遠ざかり、安易な点数主義やスキルとしての語学に傾斜していくことは、この目的から離れることはあっても近づく道とはならない。

このような理念の下に、外国語センターが取り組んできた研究や企画には以下のものがある。

外国語センターで取り組んだ教育に関する研究

最近の研究成果として、次のものをあげることができる。

(1) 平成 6（1994）年度～平成 7（1995）年度のプロジェクト「言語テスト日英豪国際共同研究」で、筑波英語検定試験は英国の「ケンブリッジ英検」（UCLES）と相関が高く（r=0.714）妥当性の高い試験であることが実証された。

(2) 平成15年度教育改善推進費（学長裁量経費）によって、筑波英語検定試験はTOEFL-ITPと相関が高く、TOEFL-ITPでは正しく測定できない熟達度の低い学生の学力を正しく測定していることが実証された。詳細は、『筑波大学外国語センター教育改善推進事業「TOEFL-ITPの試験的実施データによる学内英語検定試験の改善」報告書』(2005年1月発行)を参照。

高大連携、社会貢献、シンポジウム、講演会について

近年、次のような活動が続けられている。

(1) 高大連携教育に関してあらゆる可能性を模索する中、茗溪学園中学校・高等学校と連携し、連続講演会を開催した。詳細は、『平成16年度 筑波大学 外国語センターによる社会貢献活動の一環としての高大連携教育に関する支援活動報告書』(2005年7月発行)を参照。

(2) 外国語センターでは大学における外国語教育に関する講演会、研究会等を随時行ってきたが、平成17年12月21日に、大学の外国語教育の現状と展望に関して他大学からも教員を招き、シンポジウムを行った。詳細は『筑波大学外国語センター主催シンポジウム 大学の外国語教育はどこに向かうのか 報告書』(2006年3月発行)を参照。

(3) 平成18年2月16日に、「国際性と地域密着性」と題し、ダグマー・ノイエンドルフ教授（オーボ・アカデミー大学人文学部）を招いて、ドイツ語教育に関する講演会を行った。

(4) 毎夏、中学校・高等学校の英語の教員を対象に英語教育に関する夏期公開講座を開催している。平成17年度（異文化理解教育）、平成18年度（ユーモアと英語教育）と、平成17年度よりテーマを決めた斬新な企画もたてられている。

(5) 平成18年度の新入生を対象にした外国語学習の勧めを内容として講演会を開学以来始めて企画し開催した。演題は、「外国語を100倍楽しむ法――『不思議の国のアリス』から『ハリー・ポッター』まで――　ことばとして外国語を楽しむ」とし、外国語センター長（安井泉）を講演者とした。新入生はもとより学群生から大学院生にいたるまで多くの学生および教員の参加を得て行われた。

当日の講演はCD化され、外国語センターのテープライブラリーで聴くことができるようになっており、希望者にはハンドアウト（8ページ）も配付している。

（やすい　いずみ／英語学・言語文化）